

花嫁のれん：家族の愛の活ける象徴

能登半島では、長い間、縁起の良い題材を描いた色鮮やかなのれんが、花嫁が新しい生活へと移ることの象徴になってきました。20 世紀半ばまでは、見合い結婚が一般的でした。通常、結婚式は、花嫁を新しい家庭に迎えるためのささやかな儀式であり、花婿の家で行われていました。花嫁の母親は、この儀式のために、装飾的な「花嫁のれん」を準備しました。花嫁のれんは、結婚式のために花婿の家に吊るされました。吊るす場所は、結婚式が行われる仏間と、居間のあいだが一般的でした。花嫁のれんは、花嫁の家族の愛情を示す象徴であり、花嫁の新しい生活への入口でした。

幸せな未来への希望

花嫁のれんは、結婚式前に花婿の実家に届けられる嫁入り道具（衣類や家具）の一つとして作られました。多くの花嫁のれんには、赤・桃・青といったお祝いの色と、縁起の良い題材（長寿を表す鶴、幸せな結婚を象徴するオンドリのつがいなど）が使われました。また、花嫁の故郷を表す絵柄も使われました。花嫁のれんの上部には、花嫁の家の家紋が配されました。花嫁がその家紋を使う最後の機会でした。

花嫁の母親が、娘のことを思いながら、花嫁のれんの模様を考えました。花嫁は、夫の家族に正式に加わるために仏間に歩み入る際に、花嫁のれんをくぐりますが、花嫁が、花嫁のれんを初めて見るのはこの時でした。この花嫁のれんは唯一無二のものであり、母親の愛と、娘の今後の幸せを願う気

持ちを具体的に表現したものでした。花嫁のれんは、結婚式後の数日間、花婿の家を訪れる人に見えるように吊るされ、それから丁寧に引き出しにしまわれて、二度と使われませんでした。

この伝統は、江戸時代（1603～1867 年）末期に始まり、20 世紀半ばまで能登・加賀・越中（現在の石川県と富山県）で広く行われていました。花嫁のれんは綿から作られるのが一般的でしたが、最も豪華なものは絹でできており、加賀友禅を用いた複雑な題材が描かれていました。加賀友禅とは、17 世紀にこの地域で発達した、防染剤を用いる染色技法です。加賀友禅による染色工程には多数の段階があり、高度な技術を必要とします。手作業で繊細な線画を描き、濃淡の効果を出していきます。花嫁のれんを作るには、6 か月を要することもありました。

新しい生活への入口をくぐる

花嫁が永遠に新しい家族の一員となるということは、結婚式前に花婿の実家の入口で行われる儀式によって示されました。花嫁は、2 つの家族の水を混ぜ、それを陶磁器の皿から飲みます。それから、花嫁が古い生活を離れることを示す行為として、この皿を割ります。この儀式のために、花嫁は、結婚式用の着物である「白無垢」を着ました。これも、新しい人生を始めることの象徴です。

花嫁は、自分の家紋と、自分の故郷からとった題材を描いた花嫁のれんをくぐることで、古い生活を離れたのです。それから、結婚式が始まる前に、花嫁は仏壇に近づいて、新しい家族の先祖に自己紹介をしたのでしょう。

花婿のためののれん

ほとんどののれんは花嫁のためのものでしたが、男性が妻の家族の養子になる場合は、「花婿のれん」が作られました。娘しかいない家では、その家系を存続させるため、娘の婿が娘の苗字になることがありました。花婿のための模様は、寒色と男性的な題材を用いる傾向がありました。強さと力を表す恐ろしい鷹、障害を乗り越えることを象徴する鯉、長寿と堅固さを表す松の木などです。

模様の流行の変化

花嫁のれんの模様は、花嫁の好みによるものでしたが、その時代の流行にも従っていました。江戸時代末期と明治時代（1868～1912 年）の花嫁のれんは、通常、長寿と幸運を表す図柄を綿に染め付けたものでした。亀と鶴を題材にしたものが一般的でした。

20 世紀から現在までに、花嫁のれんはより手の込んだものになりました。生地は綿から絹に変わりました。また、季節の花々やよく知られた風景など、現代的な魅力を持つ複雑な模様や絵を描くため、

加賀友禅の染色方法が用いられました。化学染料がより鮮やかな色を出せるようになったため、1945 年からは、より明るい色が一般的になりました。

衰退した芸術の復活

結婚式は、1970 年代以降進化し、家で行われる個人の儀式から、ホテルで催される手の込んだ催しになりました。花嫁が自分の家族から嫁ぎ先の家族に入ることは、重みを失いました。なぜなら、より多くの女性が外で働くようになり、経済的に自立したからです。花嫁のれんの人気は薄れました。各家庭は、娘が結婚して家を離れる際に、花嫁のれんを作ることをやめました。近年、これらの花嫁のれんに対する関心が、再び高まってきました。2004 年、七尾の一本杉通り商店街の店主たちが、毎年 5 月にあるゴールデンウィークに、自分の家の花嫁のれんを展示するようになりました。2016 年には、花嫁のれんを 1 年中展示するため、商店街からすぐのところに「花嫁のれん館」が開館しました。花嫁が家族との絆を永遠に断ち切るという本来の意味は失われましたが、能登半島の一部の家庭では、過去の伝統を尊重する方法として、花嫁のれんを使い続けています。